

川原寺出土重弧紋軒平瓦細見

はじめに 瓦づくりの最大の特徴は、徹底的な型利用といえる。これは一定の規格品を一時に大量に作る方式として優れているからだ。軒瓦の瓦当紋様も多くは瓦範という型を使う。瓦範の多くは木でできており、時の経るに従い傷ができてたり割れたりする。この傷を判別すると同じ瓦範を使った軒瓦「同範瓦」が識別できる。瓦研究において同範瓦がもつ重みは、近年、とみに大きくなりつつある。

ところが、なかには、瓦範を使わず瓦当紋様をつける軒瓦がある。斑鳩寺や坂田寺の手彫り忍冬唐草紋軒平瓦がその一つ。これらは列島最古の唐草紋軒平瓦として、またその流麗な紋様が多く研究者の注目を引いた。それに対して「重弧紋軒平瓦」は、その単純さが災いしたのか余り研究者に注意されたことがなく、7世紀中頃に流行した軒平瓦の一様式、ぐらゐの評価でとどまるのが関の山だった。けれども、重弧紋軒平瓦に組み合う軒丸瓦をみると、こちらは「山田寺式」「川原寺式」「紀寺式」など様々な様式に細分されている。ならば、対応する重弧紋軒平瓦にも違いはあるはずだ。今回は、川原寺の重弧紋軒平瓦を祖上にのせて検討してみよう。

川原寺重弧紋軒平瓦の分類 川原寺の重弧紋軒平瓦の型式分類は、40年前刊行された『川原寺発掘調査報告』（奈文研学報第9冊、1960）にすでにある。そこでは、四重弧紋軒平瓦651型式を桶巻き三枚作りと認定し、顎の寸法をもって大きく2類に分類、さらに5種（A～E類）に細分した。『川原寺報告』の「別表Ⅰ軒丸、軒平瓦分類表」をみると、651型式の顎の長さは、A：5.6cm、B：7.0cm、C：8.0cm、D：9.7cm、E：10.0cmと知れる。これらは顎の長さ7cmを境に、それ以下のA・B類とそれ以上のC～E類に大別され、A・B類の円弧内径平均20.5cmに対し、C～E類は15～16cmと小さく、また、側面のヘラケズリの方向が両者逆転すると報告された。A・B類は瓦当から狭端方向へ、C～E類は狭端から瓦当方向にヘラが動く。なお、四重弧紋651型式と同じ作りの三重弧紋652型式があるが、四重弧紋329点に対しわずか3点で、出土量は1%に満たない。この傾向はその後の調査でも変わらない。

『川原寺報告』に示された四重弧紋軒平瓦分類は、顎の長さを基準とした単純な分類に見えるが、実はこの分類、瓦当紋様の微妙な違いや製作技法の違いともうまく対応しており、捨てたものでない。そこで、大別された二つのグループを、1類と2類と名付け、A～Eの細分を「種」とよんで、もう少し詳しく種ごとの特徴を述べよう。

川原寺四重弧紋軒平瓦の細分とその特徴 A種は顎がもっとも短く、5.5cmしかないが、段部の深さは1.4cmと深い。凹線が広く、弧線には平坦面がある。凸面と顎面はヨコナデ、凹面は雑なナデ調整で布圧痕が残る。凹面と顎面の瓦当近くだけは横方向にヘラケズリする。

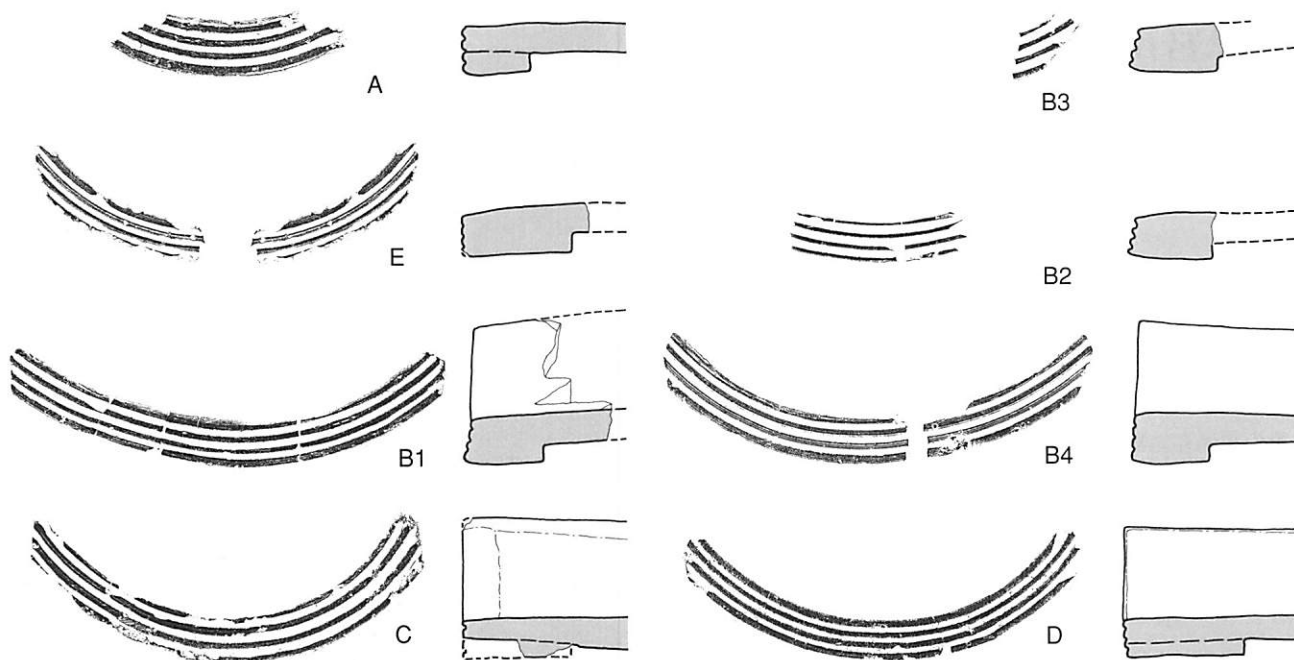
B種は顎の長さ7cm前後。多くの個体で顎面に鈍い稜線が走る。瓦当紋様は基本的に凹線が太い。瓦当面と凹面の作る角度が鈍角になる「ノサ」の瓦。凹凸面ともにナデとミガキで丁寧に調整する。瓦当紋様や細部の形態によって、B1～B4の4種に細分できる。B1は凹線がやや太く弧線はゆるい丸みをもつ。B2は凹線が特に太く弧線は強い丸みをもつ。B3はB2に似るが弧線が若干低く、顎面両端の面取りが幅広い。B4はB1に似るが、凹線が細く、第2弧線が特に扁平。B1の瓦当幅33.6～35.9cm。

C種は顎の長さ8cm前後。凹線がやや太いが、B種よりも弧線に丸みが強く凹凸が著しい。瓦当面と凹面が作る角度はほぼ直角。凹凸面および顎面の調整が粗雑なため、凹面には布圧痕や桶の側板圧痕などを残す。焼成は軟質のことが多い。

D種は、顎の長さ9～9.5cmとやや長い。凹線が細く深いのと弧線が丸いのが特徴。瓦当面と凹面が直角かまたはやや鋭角（「カギ」）となる。凹凸面や顎面はヨコナデとミガキで丁寧に調整する。瓦当幅27.5～29.4cm。

E種は、顎の長さ9～10cmあり、C種とほぼ同じか少し長い。凹線は細いが、弧線がやや幅広く扁平。顎の両側面に幅広い面取りをする。瓦当面は凹面とほぼ直角になる。明白色系統の明るい色をした個体が多い。

以上の四重弧紋A～E種の出土比率は、第1～3次調査では、A2点、B25点、C21点、D178点、E21点、不明82点（『川原寺報告』別表Ⅰ）。1995・96年調査では、A0点、B12点、C9点、D33点、E7点、不明8点（『年報1997-II』）だった。ともにD種がもっとも多く、出土量の半数に達する。



川原寺出土重弧紋軒平瓦各型式 1:6

まとめ 今のところ2点しか確認できていないA種を除くB～E種は、1類（B種）と2類（C～E種）の間に大きな製作技法の違いがある。それは次の三点にまとめられる。

1；1類はバケツを伏せたような截頭円錐形の桶を使い、
2類は円筒形の桶を使う

2；瓦の内径は1類が大きく、2類は小さい

3；側面のヘラケズリの方向が1類と2類で逆になる

だがその一方で、1・2類とも、瓦の側面の凹凸面側を深く削り、断面が剣先形になるように加工する特徴や凹凸面を丹念に調整する点は共通する。これは三重弧紋652型式にも認められ、川原寺の重弧紋軒平瓦に特有だ。

これを山田寺の四重弧紋軒平瓦と比較するに、金堂創建の四重弧紋AⅡや中門・回廊および塔創建の四重弧紋AⅠは、四重弧紋の上から2条目（第2弧線）がほかより太い。これは4条ともほぼ同じ太さの川原寺の四重弧紋軒平瓦との大きな違いだ。それが、塔創建補填瓦の四重弧紋BⅠ・BⅡ、あるいは宝蔵などの四重弧紋CⅠになると、弧線の太さはほとんど同じになる。だが、平瓦部の横断面形をみると、AⅡ・BⅠ・BⅡなどは分割断面を残し、AⅠ・CⅠは分割破面を削るときに凸面側を深く削って側面が互いにほぼ平行する形に仕上げる。また、凹面はBⅠ以外ほとんど調整しない。

これらは、いずれも川原寺の四重弧紋軒平瓦にはない特徴であって、それは石川麻呂造営期の軒平瓦に限らず、時期的には川原寺の造営と平行している天智・天武の代

に作られた軒平瓦にも認めうる。また、顎の長さも、山田寺には創建期と造営再開期を問わず、6cmを越えるような長いものは一つもない。つまり、山田寺と川原寺はその創建軒丸瓦がほぼ誰でも区別できるように、軒平瓦を識別することもさほど難しくはない。

川原寺に類似した四重弧紋軒平瓦を飛鳥地域で求めると、雷丘北方遺跡やその近辺から出土した資料がある。4条とも同じ太さの弧線、側面を断面剣先形に加工する手法、凹凸面の丁寧な調整などが共通点だ。ここからは川原寺の創建軒丸瓦601型式E種もでているが、本来の組み合わせは、重弧紋縁鬼面紋軒丸瓦（新庄町慈光寺跡と同範）だろう。慈光寺跡からは外縁を彫り直して外側を斜縁にしたものもある（同範・彫り直しは奈良県教委・近江俊秀氏と確認した）。

一方で、位置的にも時期的にも近接している小山廃寺（紀寺跡）では、創建軒平瓦に三重弧紋を採用し、川原寺や雷丘北方遺跡とは様相を異にする。

従来、藤原宮式あるいは本薬師寺式以前の軒瓦の様式区分は多くが軒丸瓦だけの分類に頼っていたきらいなきにしもあらず。だが、藤澤一夫先生が提唱された「軒丸瓦・軒平瓦の二者一対を様式研究の単位要素とする」方法（『佛教考古學論叢』考古學評論第三輯 東京考古學會1941）、それは半世紀以上を経ても未だに有効かつ強力だ。そして、瓦範を使わない重弧紋軒平瓦にも軒丸瓦の様式に対応する違いは確実にある。たかが重弧というなかれ。

（花谷 浩／飛鳥藤原宮跡発掘調査部）